

## I 体罰の起因となる教職員の心理

### (1) こんな思いを抱いたことはありませんか

#### ★これだけやっているのに…

- ・勝てない。
- ・指導したとおりのプレーができない。
- ・指導に従わない。
- ・ミスばかりする。
- ・集中できない。
- ・チームがまとまらない。

指導方法に課題

#### ★熱い思いで指導しているが…

- ・ついカッとなってしまう。
- ・非難したり、睨んだり、威嚇的な言動をしてしまう。
- ・つい怒鳴ってしまう。
- ・指導しているうちに怒りが増してくる。

感情のコントロールに課題

こんな思いを抱いたことはありませんか。

教職員の認識に課題

#### ★自分のやり方は間違っていない…

- ・保護者からは「殴ってでも」と言われている。
- ・児童生徒は体罰があっても自分を慕い、感謝してくれている。
- ・体罰は、躰・教育の一環として、時には必要である。
- ・体罰を含む厳しい指導を受けて、自分は成長させてもらった。

指導目標の適切さに課題

#### ★周囲からの期待や評価を気にして…

- ・部活動中だけでなく、教室や学校外においても礼儀正しい態度がとれないと、顧問の自分が恥をかかされたと思う。

#### ★目標を達成するために…

- ・限られた条件下では、何より根性が大切である。
- ・児童生徒のゆるやかな成長を待っている余裕はない。

(2) 今一度、立ち止まって考えてみませんか

★これだけやっているのに…

- ・「どうしてできない！」と児童生徒の責任にしていますか。

指導方法に対する自信のなさからくる「焦り」

p. 23「指導者の資質」へ

★熱い思いで指導しているが…

- ・児童生徒を伸ばすことよりも、自分の満足を優先していませんか。
- ・児童生徒の思いよりも、自分の思いが強くなっていませんか。

権威や自尊心を傷つけられることへの「苛立ち」

p. 10「アンガーマネジメント」へ

立ち止まって  
考えてみると

★自分のやり方は間違っていない…

- ・児童生徒が感謝しているのは、あなたの「体罰」にではなく、「熱意、真剣さ」に対してではないですか。
- ・あなたがそのように成長できたのは、本当に体罰のおかげですか。

「愛の鞭」肯定論

p. 26「具体的事例」へ

★周囲からの期待や評価を気にして…

- ・児童生徒の本当の気持ちに答えることを忘れていませんか。
- ・気にしているのはあなたの評価ではないですか。

★目標を達成するために…

- ・必要以上に厳しくしていませんか。
- ・競技目標達成のために、児童生徒の成長を妨げていませんか。

不適切な目標設定

p. 25「部活動指導の目標設定」へ

部活動の主役は児童生徒です。それを支えるのが指導者の役割です。

## Ⅱ 指導者の資質

### (1) コーチとして必要な資質

#### コーチ(COACH)として必要なツール

- C Comprehension (理解)
- O Outlook (展望)
- A Affection (愛情)
- C Character (人柄)
- H Humor (ユーモア)

これらの資質をバランスよく備えていることが指導者として望まれます。

研修資料の具体的事例 (p.28 「効果的な部活動指導について」) に沿って考えてみましょう。

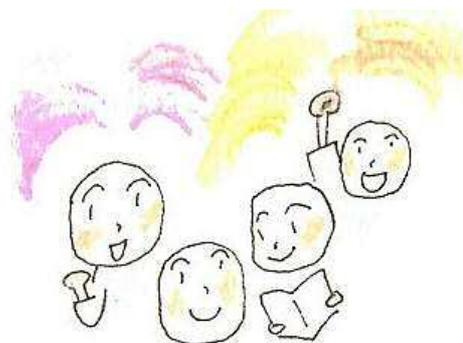
剣道部の顧問 I 教諭は競技歴が長く、経験に支えられた高い専門的知識を備えています。全国大会出場を目標としながらも、勝利至上主義ではなく、厳しい練習を通じた人間教育に重点をおいています。しかし、目の前の児童生徒の行動からは「真剣さ」が伝わってきません。

この現状を打開するきっかけを、I 教諭は体罰ではなく、「先輩指導者」からの言葉に求めます。

#### I 教諭の、コーチ (COACH) としての行動

- C 児童生徒一人一人の一生懸命さに気付く。
- O 個に応じた目標を設定する。
- A 一緒の時間を過ごす。
- C よい関係を続けていく努力をする。
- H 剣道以外で交流を深める。

引退した部員との会話をきっかけに I 教諭の内面が変化し、剣道部員との関係も好ましくなっていきます。生徒だけでなく指導者にとっても、充実した部活動が展開されています。



## (2) 児童生徒とのコミュニケーション

児童生徒のコミュニケーションを円滑に進めるためには、彼らに上手にメッセージを送る必要があります。以下に、効果的なメッセージを送るためのチェックポイントを紹介します。あてはまる項目に、チェックしてみてください。

□1 (主語)「自分のメッセージとして、伝えていますか？」

「私は～」 「私の～」 とすることで、自分の考えとして伝えましょう。

□2 (対象)「伝えたい相手に直接伝えていますか？」

指導者は、自分の考えを児童生徒が理解していると思い、あえてメッセージをほのめかすだけにとどめたり、メッセージを人づてに届けたりしがちです。直接本人に伝えましょう。

□3 (項目)「一つのことに絞って、伝えていますか？」

考えをまとめ、伝えたいことを一つに絞ることで、話の焦点がはっきりしなくなることを防ぎましょう。

□4 (時機)「すぐに伝えていますか？」

すぐに伝えることで、彼らに効果的なフィードバックを与えましょう。

□5 (雰囲気)「穏やかに伝えていますか？」

あなたと話すことを避けたり拒絶してしまったりする要因は、なくしましょう。

□6 (目的)「意図を、明確に伝えていますか？」

含みや皮肉を用いず、考えの意図をはっきりと伝えましょう。

□7 (用語)「相手が分かりやすい言葉で伝えていますか？」

話を理解するために必要な用語は、聞き手が理解できるものにしましょう。

□8 (統一性)「話の中で、一貫したメッセージを伝えていますか？」

肯定と否定が入り混じった二重のメッセージは混乱を招きます。ジェスチャー・表情にも、言葉と同じ意図を込めましょう。

【よくない例】

・「私は君がよい選手だと思うけれども、今度の試合は出場しないほうが君のためだと思う。」

・「失敗しても大丈夫だ。」と険しい顔つきで伝える。

□9 (繰り返し)「大事なことを、何度も繰り返して伝えていますか？」

キーワードを強調します。ビデオ・写真などで視覚にも訴えましょう。

□10 (確認)「正しく伝わったかどうか、確かめていますか？」

返事の有無や表情で確かめ、時には質問を試みましょう。

(参考) 「スポーツ指導者の資質能力向上のための具体的方策について」

(平成 25 年 7 月 スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議報告書)

「コーチング・マニュアル メンタルトレーニング」

(1991 大修館書店・R マートン著 猪俣公宏監訳)

### Ⅲ 研修資料

#### (1) 部活動指導の目標設定

目標を設定する際には、下図を利用するなどして複数の観点から部や個人の目標を考えさせ、勝利至上主義（I 偏重型）などに偏ることのない、バランスのとれた目標設定をさせましょう。

基本4 観点別整理グラフ図	
1 目標・目的 対象内容	<div style="text-align: center;">有形的</div> <p>⑨ 祖父母が、私の競技をみて元気になるようにする。</p> <p>⑩ 同種目に取り組む後輩のBさんが、自己ベスト記録(4m90以上)を出せるように支援する。</p> <p>⑪ チームが、いつも熱心に練習に取り組んでいると他部の生徒から評価されるようにする。</p> <p>⑫ チームの県大会出場者が、前年度を上回るようにする。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">自分以外</div> <div style="border: 1px solid orange; padding: 5px; margin: 0 10px;">Ⅲ</div> <div style="border: 1px solid orange; padding: 5px; margin: 0 10px;">I</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">自分</div> </div>
	<div style="text-align: center;">無形的</div> <p>⑬ 家族や応援して下さる方々が、取組や競技を見て感動するようにする。</p> <p>⑭ 後輩が、「努力は報われる」「やればできる」と感じるようにする。</p> <p>⑮ 地域の方々が、陸上部の活動に関心を向けてくれるようにする。</p> <p>⑯ 部員相互が、助け合い支え合いたい気持ちが高まるようにする。</p> <p>① 私は、走幅跳で5m50以上を跳び優勝する。</p> <p>② 私は、大会の最優秀選手賞を獲得する。</p> <p>③ 私は、県大会を全国大会のリハーサルと位置付けて1本目の試技で5m40以上を跳ぶ。</p> <p>④ 私は、リレー競技で第4走者を務め大会新記録(49秒9)で優勝する。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid orange; padding: 5px; margin: 0 10px;">IV</div> <div style="border: 1px solid orange; padding: 5px; margin: 0 10px;">II</div> </div>
2 目標例	<p>私は、後輩から競技以外のことを相談される人間となり、地区大会では走幅跳で5m50以上で優勝、リレー競技で第4走者を務めて大会新記録49秒9で優勝し、家族や応援して下さる方々が感動するようにする。</p> <p>※(主要な①④⑦⑬をまとめて目標設定)</p>

(参考)「部活動と生徒指導」(2009 吉田浩之著 学事出版)

## (2) 具体的事例

### プロフェッショナル 仕事の流儀

(NHK総合テレビ 平成25年9月9日放送から)

#### ●菊池省三さん (小学校教師、学級崩壊するクラスを次々と立て直す) ～ 褒め言葉のシャワー ～

##### ・「自信が、人を伸ばす」

自分がないからつるむんでしょうね。やっぱり他からの評価が怖いから、変に攻撃的になったり、投げやりな態度をとったりするんだろうと思いますよね。

みんなを褒めるとかみんなから褒められるとか、それを喜ぼうとか喜んでもらうとか、そういうことがお互いの成長につながるという気がします。

##### ・「成長ノート」

(児童が書いた文の返事に、週末、約10時間をかけている。)

どんなにいたずらでやんちゃな子がいて普段でたらめやっても、書く言葉ってあるじゃないですか。書いた言葉は、少なくともその瞬間は本当のことだと思うんですよ。もちろん書いて5分も経てば忘れてしまって、違うことをまた繰り返すかもしれないけれども、少なくとも書いた瞬間はそういった思いでその子はいただろうと。

信じるっていうことが、大前提だろうとは思いますが。

##### ・「啼啄 (そったく)」

本人がそうやって素直に一生懸命頑張ろうとしているってことを、みんなにも認めさせたいわけです。やっぱり、一人一人の自信と、それでいいんだよってというような安心みたいなものを、個の中と集団、学校なら学級という集団の中に育ててあげる。その時間と手間暇をかければ、あとはたくましく育っていくような気がするんですよ。

※ 啼・・・ひな鳥が卵の内側から殻を破る音

啄・・・親鳥が外側から卵をたたく音



## プロフェッショナル 仕事の流儀

(NHK総合テレビ 平成25年9月9日放送から)

### ●岡田倫代さん（定時制高等学校教師 香川県）

#### ・「バカ」

例えば、生徒が「バカ」とか「死ね」とかいろいろ言いますよね。中には「死にたい」とっていうのもあるんだけど、毎回の「バカ」でも、「バカ」一つとっても、今日の「バカ」は「ちょっとほっといて」のバカだったり、今日の「バカ」は「俺、これに集中してる」だったり、「死にたい」とって言っても「つらいんだよ」とって言っているのか、「寂しいよ」とって言っているのか、「助けて」とって言っているのか、本当に「死のう」と言っているのか、そこをきちんと正確に聞かないといけないわけです。

だから、見て、次に聞いて、それを正確にその子を捉えて介入を始めて。もちろん、関わりの一環ですけど、次に手を差し伸べるかなって言う……。



#### ・「寄り添って、背中を押す」

私は、差し出した手は、絶対、引っ込めないんです。どんなになろうと引っ込めない。絶対に関わろうとする。どうして関わられるか？生徒のことが好きになるからでしょうか。かわいいもの。

#### ◆卒業生より

岡田先生からの言葉や、知らず知らずつけられていた自信やその力というのが、もう全ての始まりです。今でも、元気をもらいに、たまに定時制の職員室に行くんですが、もう帰るときには、「よし、明日も頑張るぞ」とっていう気持ちで、きらきらして輝いて帰っています。

## ●「効果的な部活動指導について」

愛知県立高等学校教諭 T. I.

私が教員となり、剣道部の顧問として部活動の指導に当たり、24年が過ぎようとしています。「体罰によらない部活動指導について」ですが、私自身は、体罰をしたことはありません。「体罰によらない」のではなく、体罰ということが、私の指導の選択肢にはないのです。では、怒ることはないのかというと、そうではありません。「なあなあ」の雰囲気は、嫌いです。今回のテーマについて、深く考えたことがないので、原稿依頼をいただいたことをきっかけに、私自身の部活動指導について振り返ってみました。

私は、小学校1年から剣道を始めました。中学校から大学まで日本一を目指し、厳しい稽古に取り組んできました。大学卒業後は、すぐに教員になることができました。これから、高校生に剣道を通していろいろなことを伝えて、インターハイに出場するんだと、夢でいっぱいでした。しかし、剣道部員はというと、「あれ？」と首をかしげることばかり。「用事があります。」と練習を休んだり、「初段をとれたから辞めます。」と部を去ってしまう。「強くなりたい」「勝ちたい」と思わないのだろうか。私にとって、理解しがたいことばかりでした。

あるとき某大学の教授であり剣道部の監督の先生とお話をする機会がありました。先生は「ときにはバーベキューなどのお楽しみ会などして、剣道以外で交流を深める場面を作ったりすることも大切だよ。」と言われました。その時は、深く受け止めず、「そういうものかな。」程度に聞いていました。

そのことを忘れかけていたある日、剣道部を引退した女子部員と食事をする機会がありました。当時女子部員は3名と少ない人数でしたが、男子に負けじと練習する元気な生徒たちでした。あれは、きつかったのだ、つらかったのだ、楽しい会話が続きました。その中で「2年の〇〇くんは、いつも一所懸命稽古に取り組んでいて、頑張り屋だよねー。」の言葉に、私は思わず大きな声をあげてしまいそうになるくらい驚きました。なぜかというと、私には、彼が一所懸命にやっているように見えなかったからです。つまり、彼の一所懸命は、私には、わからなかったのです。私は、生徒たちに高過ぎるハードルを用意して、それを飛び越えることだけを評価していると気づきました。これには、とてもショックを受けました。生徒たちの頑張りに気づけるようになりたいと思いました。

それからの私は、生徒たちとコミュニケーションをとることを心がけるようになりました。これは、ただ会話をするというものではありません。たわいのない生徒同士の会話や遊びに、立ち入るのではなく傍観する。ただ見ているだけ、聞いているだけ、感じているだけ、一緒に時を過ごす。そのことによって、いろいろなことが感じとれるようになったような気がします。そして、今では、

低いハードル、少し高めハードル、飛び越えるのに少し勇気がいるハードル、色々な高さのハードルを用意できるようになったのではないかと思います。

現在の勤務校でも、全国大会出場を目標に、生徒たちと共に部活動に取り組んでいます。きつい練習は、つらいかもしれませんが、でも、生徒たちは、目標達成のために自ら厳しさを求めて取り組んでいると感じています。そんな生徒に励まされることも多々あります。この関係を、これからも続けていきたいと思っています。

## ●「効果的な部活動指導について」

愛知県立高等学校教諭 S.N.

教員になって十数年いろいろな気質の生徒に接してきた。部活動ももちろん同様で、どのような生徒と向き合うことになっても、私学に負けない強いチームを目指して指導を続けてきた。私と同じような考えを持ち、多くの先生方が情熱を傾けて部活動に熱心に取り組んでいる。しかしその一方で、体罰が社会問題として取り上げられ、改めて部活動の在り方が問われている。そこで、どうすれば体罰なく指導が進められるかを考えてみたい。

指導者としての今の私があるのは多くの先生方との出会いが大きく影響している。私自身、小学校からバスケットボールを続けてきた。全国大会などにも出場し、選手としていろいろな経験をしたが、指導を始めた頃は、自分の経験だけが指導の頼りであった。信じたことをひたすら追求し、ある程度結果も出た。しかし、結果が出ないときは、その責任の矛先を生徒に向けていた。その後、国体スタッフなどを経験し、全国レベルの指導者に接する機会も増え、多くのことを学んだ。そういった指導者の指導方法は十人十色であるが、私にとってはどのスタイルもとても新鮮であった。

指導方法の引き出しが増えることで心にゆとりが生まれた。特に、計画通りの成果が得られなかったときに、異なったアプローチの方法を知っていることで余裕が生まれ、生徒に向けていた矛先を自分の指導方法に向けられるようになった。また、自分が強いチームを見て感じたことを生徒たちに正直に話し、目標とする位置を具体的に認識させたことも生徒の意識を高める上で効果的であった。厳しい中にもお互いを尊重できる環境をつくることで、チームは飛躍的に成長できる。体罰は必要ないと私は考えている。

強いチームをつくるには、『メンタル面』を鍛えることが重要である。試合の重要な局面を迎えたときに平常心でいることは容易なことではない。プレッシャーのかかった状況で落ち着いてプレーする為には、そのような状況下での練習を行うことが大切である。『失敗すると殴られる』こともある意味プレッシャ

一である。このような構図で体罰は行われてきたのかもしれない。では、体罰ではなく、どのような形でプレッシャーをかければよいのか。

私は練習中に意図的に通常とは違う状況を作り出すようにしている。例えば、練習の始めに大きな負荷のかかったトレーニングを実施し、その後の練習で通常以上のスピードを要求する。また、特定の練習で達成不可能ではないかと感じるほどのノルマを課し、達成するまで継続させる。ここでポイントとなるのがトレーニングの内容と課題設定の具体的数値である。ほとんどの生徒は無意識に自分の限界をつくっている。ここでは、その限界を超えられるようにする課題設定が必要となる。理不尽と感じられるほどの練習も、生徒に常に声をかけ、健康管理をしっかりと行えば、次の段階への重要なステップアップになる。

強いチームにしようと思えば生徒への要求も高くなり、指導者と生徒の間にギャップが生まれる。生徒の意識レベルと指導内容を常にリンクさせるために、さまざまな指導法を学び、適切に練習を設定して、生徒を成長させていくことができれば体罰をすることなく強いチームにしていくことができるのではないだろうか。

